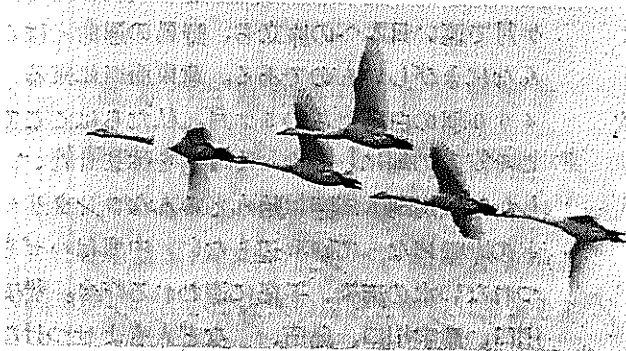


白鳥のヒマラヤ越え



「白鳥はヒマラヤ山脈八千メートルの尾根を飛び越えてインド洋や地中海沿岸地帯まで南下する。」といったら信じる人がいるだろうか。日本の鳥類辞典や鳥の専門誌を見ても、どこにもそんなことは書いていないし、大抵の人は「まゆづばもの」だと思うかも知れない。

だが、鳥類の超能力は人間の考えも及ばぬ次元で回転していることが多く、ここに提示する「白鳥のヒマラヤ越え説」も単純に否定できない要素をはらんでいるように思う。

ある日、大森常三郎氏（日本白鳥の会理事・日本山岳協会第一種指導員）が「モンスーンあけの十月中旬、ヒマラヤ、マナスル山群八千メートルの上空を白い鳥の群れが南の方へ飛び去るのを発見した。」と記されている山岳専門誌（岳人）の切り抜き記事を持ってきてくれた。そこに記されている十月といえ、そろそろ白サギなども南下する季節であるので、白い鳥即ハクチョウ類であるとは断定できがたいのだが、興味深いデータであった。また同誌には、ヒマラヤ山系には生息していないといわれるカモの幣死体をアピ頂上近くの雪の上でひろったという例も発表されていた。これを見た私はそこに書かれている白い鳥やカモ類は一体どこへ行こうとしていたのだろうかという疑問が残った。

その後、私は1960年代から70年代にかけて編集されたという「ソ連邦鳥類辞典」（英文）を見る機会に恵まれた。この本が百科辞典のように数冊に分けて編集され、積み重ねると1メートルにもなるかと思われる圧倒的なボリュームであったことにも驚ろかされたが、そんなことより

本田 清

も、コハクチョウの分布南限は、ベトナム沿岸地帯からインド洋にそそぐインダス川流域、さらには地中海北部にまで及ぶことが図解と文章によって明示されていたことであった。

私は、これまでに欧米諸国におけるすぐれたハクチョウ類研究文献をいくつも見ているが、インド洋にまで南下していると書かれているものはなかった。またソ連における鳥類の研究は、ヨーロッパ諸国やアメリカに比べてそれほど進んではないであろうと推定していただけに、このソ連邦鳥類辞典と邂逅するに及んで、またしても「負けた。」という一種の敗北感のようなものを味わされた。

1976年、私はエジプトの古代遺跡を尋ねる機会があった。そのとき撮影してきた4,000枚ほどの写真を整理していたとき、あの巨大な神殿石柱群や、古墳壁面に刻まれ、またえがかれているおびただしい象形文字と幾多の偶像群の中に、必ず「ガン・カモ科」の水鳥が見られることに気づいた。もっとたんねんに見ていくと、いくつかの哺乳類の獣面人身像にまじって、明らかに白鳥と見られる頭部と首を持った偶像もあった。いまその偶像のもつ意味についてはふれている余裕はないが、とにかく古代人類文化の発生期といわれる紀元前4,000年頃にはすでに「ガン・カモ・ハクチョウ」の類が、北緯30度から20度線上の北アフリカ一帯に分布していたことを証明するひとつの史料であることはまちがいない。

こうしてみると、シベリヤの北緯50度以北に繁殖地があるといわれているオオハクチョウや、もっと極北の60度以北に繁殖しているといわれるコハクチョウが、ユーラシア大陸を一気に南下してインド洋まで渡り、そしてまた帰北するという生き方は、人類幾千年の有史以前から繰り返されてきた事実なのかも知れない。

かの「まぼろしのような白い鳥のヒマラヤ越え」もむべなるかなというべきか。